

# 定年退職の方々を送る

## 退職にあたって

1967年4月に入学して以来、学生、院生、教員として46年間にわたる東京大学での生活が終わろうとしています。その期間の大半は工学部に所属していましたが、理学部では最後の10年を過ごさせていただきました。高校生のころは、大学では物理学を研究しようと周到な計画を立てて勉強をしていました。しかし、入学後間もなく勃発した大学紛争の少なからぬ影響で、工学部で物

内田 慎一（物理学専攻 教授）

理にかかわることになりました。理学部に移らせていただきましたのは、せめて最後の10年間は研究と学生の教育に専念し、初心に戻って物理学を楽しもうと考えたからです。専攻長やグローバルCOEなどのアドミニストレーションにかかわらなければならないなど多少の「誤算」はありましたが、世界トップクラスの同僚や学生との交流を通じて、なんとか物理三昧の日々を送ることができ



ました。短い挨拶ではありますが、理学部の一員であったことを誇りとして、東京大学を去らせていただきます。有難うございました。



## 内田慎一先生を送る

藤森 淳（物理学専攻 教授）

内田慎一先生は、東京大学工学部物理工学科を1971年に卒業、田中昭二先生の指導のもとに学位を取得されました。その後、グルノーブルの強磁場研究所滞在を挟んで工学系研究科、新領域創成科学研究科に在籍され、2002年本研究科に着任されました。1984年に、当時の超伝導研究の本流から離れたビスマス酸化物超伝導体の研究を開始され、金属絶縁体転移と超伝導の関係など現在の物性物理学で主流となっている課題に焦点を当てた先進的な研究をされました。1986年にスイスのグループが複合銅酸

化物における超伝導の兆候を報告すると、ただちに超伝導相を同定し高温超伝導の実在を証明しました。以降、高温超伝導機構と異常物性の解明という、物性物理学史上かつてない難問に取り組み研究をリードされてきました。ストライプ、擬ギャップ、不純物効果、低次元系物性など、高温超伝導研究における最重要課題で先駆的な研究をされ、研究分野の流れを作られてきました。コロンビア大、ブルックヘブン国立研、コーネル大など国際的なネットワークで共同研究を主導され、現在の鉄系超伝導体の研究に至るまで、深い洞察によって超伝導体の本質的な理解を目指してこられました。

また、理学系研究科に着任されてから間もなく物理学専攻長を務められまし

た。工学系、新領域とさまざまな組織の運営を見てこられた経験と視野の広さに基づいて、理学系の常識にとらわれない改革を主導されました。また、物理学専攻と工学系物理工学専攻が共同で行ったグローバルCOEの立ち上げを主導されました。

先生とのお付き合いは高温超伝導発見の頃に始まりましたが、理学系に着任されてからさらに緊密に共同研究をさせていただいたことはたいへん幸運でした。常に本質を見通そうとする熱意と深い洞察に接することができたことは、共同研究で得られた個々の成果にも増して大きな収穫でした。今後とも後進を導いていただけることをお願いしたいと思います。

## 定年の今送る「手紙～拝啓十五の君へ～」

浦辺 徹郎（地球惑星科学専攻 教授）

定年退職に当たって恥ずかしながら告白すると、私が地質学をやろうと決心したのは進路に迷って学習意欲を失っていた高校1年生の時でした。きっかけは深海底のマンガン団塊に関する新聞記事です。資源小国日本の経済発展はその開発にかかっているという内容でした。早速マンガン団塊の本を買って著者の佐々木忠義先生に手紙を書いたところ、有り難いことに返事が来て、自分はあなたのいる所からは遠いので、神戸の友人を紹介するという文面でした。友人とは本学の地球物理学教室出身の斎藤行正先生で、ご自宅に訪ねていくと非常に親切に対応して下さい、まず東京大学理学部に進学し、大学院で海洋研究所（当時）に行くよう勧められました。ただその通り理学部地学科に進学してみると、海洋研究所には海底資源を研究している人は居ないとのことで、鉱床学講座の立見辰雄先生のもとで大学院に進学したのです。

1976年に鉱床学分野で博士号を取ったところ、翌年、ガラパゴス海嶺において潜水していたアメリカの有人深海潜水

艇アルビン号により偶然海底熱水活動が発見され、新たな海底資源として注目が集まりました。さらに1985年にアルビン号がそこを再訪したとき、その航海に招待され自分の目でそれを見る幸運に恵まれたのです。また同年、立見先生の後任の飯山敏道先生に日仏海溝計画に加えていただき、本格的に海の研究に乗り出すきっかけができました。その頃わが国においても有人潜水艇しんかい2000や、しんかい6500が建造され、西太平洋の海底熱水鉱床を調査できる環境が生まれていました。そこで、科学技術振興調整費で1993年～1998年に「リッジ・フラックス計画」、2000年～2006年に「アーキアン・パーク計画」、科研費新学術領域研究で2008年～2012年に「海底下の大河計画」と海底熱水活動に関する大型研究を主宰し、仲間の皆様と学際研究の輪を広げることができました。

このように書くと、高校生の時の夢を実現した自慢話のように聞こえないかと恐れております。しかし実際には多くの



先生のお導きがあり、自分でも不思議な幸運と、研究仲間・学生諸君に恵まれて、いつの間にか自分がここに居るといった感じがしてなりません。さらに2007年より浦環生産技術研究所教授と始めた東京大学海洋アライアンスの活動を通じてさまざまな分野の専門家と知り合うことができ、海底資源の開発を視野に入れた新鉱業法の制定や、海底資源開発10カ年計画の策定、海洋教育の促進などに幅広く携わることができたのも大きな思い出です。定年を迎えてもまだ海底資源開発は実現していませんが、夢をつないでくれる人々が育っていることに期待しつつ、大学を後にしたく存じます。

### 浦辺徹郎先生を送る

砂村 倫成（地球惑星科学専攻 助教）

浦辺先生は、1976年に東京大学で地質学の学位を取得されたのち、本学の助手になられ、1979年から2年間のカナダトロント大学での留学を経て、1985年に工業技術院地質調査所に異動されました。2000年に理学系研究科地球惑星科学専攻に教授として着任され、この度ご定年を迎えられました。先生は海底熱水鉱床などの海底の鉱物資源の研究を中心に、陸上も含めさまざまな鉱床の研究

をされてきました。とくに、深海海底熱水鉱床の研究では、世界的に先駆的な研究をされており、資源だけでなく、熱水系の水循環と海洋底拡大速度の関係を明らかにされ、地質以外にも極限生命の研究にも関わられ、会議やセミナーの場でも幅広い分野の発表に対して、いつもの確かつ鋭い質問をされていました。また、また、船を使う調査に欠かせない海外研究機関との橋渡しにも尽力されるとともに、海底熱水系の大きな4つの国際プロジェクト研究を、1987年から今年度までほぼ継続リーダーとして牽引されてきました。ここ数年は、科学者の視点からの社会貢献も重視し、東京大学海洋

アライアンスの立ちあげや副機構長を勤めるとともに、その幅広い知識や人脈から国連の大陸棚延伸委員として日本の大陸棚延長にご尽力なされています。最近では、沖ノ島北側の延長域が認められる上で浦辺先生のご尽力があったと関係者の方から伺いました。退職後も、国連の大陸棚委員を続けられるとのことですが、無給な上に激務とのこと。今後も海底熱水系や海底資源の研究や海洋アライアンスを通じた教育など幅広い視点からご助言いただけるよう、ご健康をお祈りいたします。長い間ありがとうございました。

## 時代はまわる

私が大学に入ったころは、まだ正門前の本郷通りを都電がのんびりと走っていた。入学後もストライキでほとんど授業は開かれず、翌1969年1月の「落城」まで喧騒と高揚の時代が続いた。しかし、当たり前なのだが、時代は変わった。あの当時、安田講堂前から銀杏並木まで一面を埋め尽くした学生の姿はもうないし、「花はどこへいった」を唄っていたピーター・ポール&マリーの、ブロードで長身だったマリーさんも今はいない。

大学院生として初めて重力波検出実験に参加した頃は、理学部旧1号館の中庭に作られたバラックの小屋が実験場所だった。雨が降ると床上浸水で、その後の泥のかき出しが一仕事だった。そのような環境でよく精密実験ができたと思うが、当時は新しい研究分野を切り拓くという思いで皆が懸命だった。その後思いもかけず長い時間がかかってしまったが、ようやく日本のKAGRA計画などの、重力波を実際に観測できるだ

### 坪野 公夫 (物理学専攻 教授)

けの感度をもった大規模検出装置の建設が世界的に始まった。宇宙で大規模で急激な変化があると(たとえば太陽より重い星同士が衝突するような)、まわりの時空にひずみが生じ、そのひずみは光の速度で周囲に伝搬していく。これが「時空のさざなみ」とよばれる重力波である。このひずみはきわめて微小であるため(通常 $10^{-21}$ 以下)、いまだかつて重力波の直接検出には成功していない。しかし、私の経験と勘が正しければ、10年以内には確実に重力波は受かっているであろう。そのときには、これまで誰も見たことの無かった中性子星やブラックホールがその姿を現わすはずである。さらにその先には宇宙論を始めとした豊かな物理が開花を待っている。自分がそのとき最前線にいないことは寂しいが、その基礎を築いた中の一人として誇らしく思うことであろう。重力波のように時間を要する研究の場合、自分がどのフェーズに位置するかは単なる巡り合わせである。



自分に定年がくるとは誰もが思いもしないだろう。しかしそれは必ずやってくる。物事すべてに終りがあるように。成果がなかなか出ない研究にもかかわらず同僚の先生方からは暖かい理解と支援をいただいた。事務職員や技術職員の皆さんには長らくお世話になってしまった。そして何よりも研究室のスタッフと学生の皆さんは研究を牽引していく主体であり私の誇りであった。今後は研究室の運営は若い人に引き継がれるが、それは重力波研究にとって歯車がひとつ進むことであり、時代がまわることである。

## 坪野公夫先生を送る

須藤 靖 (物理学専攻 教授)

坪野先生は、1974年物理学科を卒業後、平川浩正先生のもとで重力波の研究を開始され、博士課程在学中に助手、その後、1987年に助教授、1999年に教授になられました。実は私は修士課程までは平川研に在籍しており、4年生の特別実験のさいには当時助手であった坪野先生にハンダ付けのやり方から始めて、当時の理学部1号館の地下にあった薄暗い実験室で一年間みっちり電子回路の指導をしていただきました。自分の机の引き出しの奥に「ミルクキー」を常備しており、ときおりニコニコしながらそれを取り出して食べてはタバコを吸っていた坪野先生の姿が今でも印象に残っています。

温厚な人柄と深い物理学の理解を兼ね備え誰からも尊敬されていた平川先生のもとで(自分がその立場になると学生から尊敬されることがいかに困難であるか実感されるのですが)産声を上げた日本の重力波実験を継承し、現在のKAGRA計画にまで発展させる原動力となったのは、坪野先生と坪野研卒業生の方々です。具体的には、国立天文台三鷹キャンパスに設置した基線長300m重力波レーザー干渉計で2000年に当時の世界最高感度での安定稼働を達成、重力波レーザー干渉計における熱雑音の起源の解明、さらには光速の等方性や重力の逆2乗則の検証実験に至るまで、きわめて基礎的かつ独創的な研究において、坪野先生は数々の優れた業績をあげてこられました。

坪野先生ご自身もお書きになっているように、何事にもフェーズがあり、ちょ

うどそれが花開く時に立ち会えるかどうかは単なる巡り合わせだとも言えます。やがて来る重力波の直接検出のために、数十年にわたり地道な努力を積み重ねることの困難さは言うまでもありません。短期的な目に見える成果ばかりを求められがちな現在においては、なおさらです(重力波実験研究からドロップアウトしてしまった私が偉そうに言えた義理ではないのですが)。しかし坪野先生が育てられた数多くの優秀な方々が重力波の直接検出を成し遂げる日は確実に近づいています。

かつて平川・坪野研で直接学ばせていただいた一人として、また物理学教室さらには理学部を代表して、この場を借りて坪野先生に心から感謝の意を表させていただきます。



## 宮本正道先生を送る

三河内 岳 (地球惑星科学専攻 准教授)

宮本正道先生は1972年に教養学部基礎科学科を卒業後、理学系研究科鉱物学専攻の大学院に進学し、博士課程在籍中の1976年に神戸大学理学部地球科学科の助手に採用されました。その後1979年に古巣の教養学部基礎科学科に戻られ、1988年に講師、1990年に助教授に昇任されました。この間1983年から1年あまりNASA ジョンソン宇宙センターに滞在されて研究を行っておられます。その後、1992年に理学系研究科鉱物学専攻に教授として着任され、2000年の地球惑星科学専攻への改組を経て20年以上にわたって理学系での研究・教育に携わって来られました。

先生のご専門は「惑星物質進化」で、これまでにない新しい概念で惑星科学を押し進められたのが特徴です。とくに計算機シミュレーションを駆使して惑星物質を解析される仕事を得意とされ、隕石母天体の層状構造モデル化や、元素拡散を用いて隕石や月試料の熱履歴を辿ることに多くの成果を挙げられております。最近では小惑星イトカワなど多くの小天体がラブル・パイル状であることが指摘されています。これらの研究には、先生の30年以上前の仕事である普通コンドライト天体の層状構造モデルが頻繁に引用され、その先駆的な仕事は今でも高く評価されています。

先生のご活躍は研究だけに留まらず、多方面にわたっています。鉱物学専攻の時代には所帯が小さいところを、各種の分析装置の導入にご尽力され、研究活動の拡大と発展を図ってこられました。ま



た、NASA 研究者との共同研究は、私を含めてそのさらに次の世代まで引き継がれており、国際的な惑星物質科学の進展に貢献されています。

今回のご定年にあたり、先生のごこれまでのご指導・ご尽力に感謝するとともに、今後のご健康と益々のご活躍を祈念いたします。



## 前へ！

過ぎてみればあっという間で、すぐそこに定年が待ち構えています。30数年前の駆出しの頃のことが、つい昨日のことのように思い浮かびます。工学部～本部～大学評価・学位授与機構～本部～教養学部～理学系と、職業人生をほぼ東大職員一直線で歩いてきました。この間、大勢の方々に出会いました。もとより自分一人だけで仕事はできませんので、只々、これまでお世話になった皆様には「感謝」と、ご迷惑をおかけした方々には「お詫び」を申し上げる次第です。

2年前から理学系の学務課長に配属となり、熱心に研究教育とその支援に取り組む教職員に囲まれ、常に世界を意識した東大理学系の姿を目の当たりにしてきました。将来性ある飛切り優秀な学生が多いことにも改めて気が付きました。一方、いろいろな悩みを抱える学生も少な

## 佐藤 哲爾（学務課長）

からずおり、気がかりな点です。悩んだときはぜひ誰かに相談し、進むべき道を見つけてもらいたいと切望しております。

さて、定年後の自分はどうかといえば、まずは、お役にたてるうちはどこかで働き口を見つけて糊口を得つつ、暇を見ては趣味（もはや道楽）の尺八三昧、といったライフスタイルを目論んでいるところです。昨年の UTRIP の留学生には尺八体験の機会を提供できましたので、また、そういったお手伝いもできればと思っています。

ところで、元旦に引いたおみくじが珍しく「大吉」ということもあってか、濱田純一総長の初夢にあやかり、私もこんな初夢を見ました。20年後の自分の姿でした。

まだ生きている様子で、だいぶ枯れてはきましたが、その分、味わいのある音



色になっています。尺八の稽古に勤んでいるようです。そうこうしているうちに、ニュース速報が入りました。何々？「東大理学部の A 教授がノーベル物理学賞を受賞！」

確か A 教授は、ALPS2 期生だったかな。去年の 1 期生で化学賞の B 氏（某企業勤務）と 2 年連続受賞か…。

夢が、どちらも正夢になることを、ひたすら願っております。理学系共々「前へ！」

## 定年後の 8 万時間

歳月の経過するのは本当に早いもので、小生があらうことか還暦を迎えてしまいました。ただいたずらに齢を重ねてしまったことに内心忸怩たる思いがありますが、何はともあれ 38 年にわたる大学職員の仕事を無事全うすることができました。

1975 年大阪大学庶務課に奉職以来、1 年間の文部省併任、経済学部勤務を経て 1985 年に東京大学に転任、原子核研究所、学生部、生産技術研究所、学術情報センター（現国立情報学研究所）、国立国語研究所、文学部、教養学部、人事課、宮城高専、放送大学東京文京学習センター、そして最後の 3 年間をこの理学部で勤務することとなりました。38 年間無事に勤務を続けられたのも、これ

## 二宮 哲平（総務課長）

らの職場でお世話になった方々のお蔭であり、深く感謝をいたしております。

さて、4 月からは悠々自適とはゆかぬまでも、少しは自分の時間が作れそうです。毎日が日曜日（サンデー毎日）みたいなものです。定年までの勤務時間が 8 万時間、余命 20 年として定年後の自由な時間が 8 万時間などよくいわれます。今後はこの時間を有効利用し、好きな書道に没頭したいと考えております。永年、独自の書風の確立を求めて書道を続けてきましたが、なかなか思うようにはいかず、今後はこの定年後の 8 万時間をしっかり利用して目標を達成したいものだと思います。また、漢詩づくり、水墨画や篆刻にも時間がとれることを楽しみにしています。書道関係の用事がな



い日は極力 1 日筆をもち、和漢の古典の臨書、作品制作、水墨画に刻印と文墨三昧の生活が楽しめれば最高だと思っています。

華甲（還暦）記念の個展を計画しておりましたが、1・2 年じっくりと題材を温め、作品制作を経て開催したいと考えております。そのさいにはご案内を差し上げますので、ぜひ会場においでください。

このほかにも 2 名の方が定年退職となり、理学系研究科を去られます。長い間、どうもありがとうございました。

富田 正明（総務課 主査）

新藤 美子（地球惑星科学専攻 主任）